

口頭発表A③

口腔保健学を基軸とした国際的社会福祉教育プログラムの構築に向けて

伊賀弘起¹⁾, 中野雅徳¹⁾, 日野出大輔¹⁾, 尾崎和美¹⁾, 竹内裕久²⁾, 吉本勝彦³⁾, 林 良夫⁴⁾

1) 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 2) 徳島大学医学部・歯学部附属病院

3) 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 分子薬理学分野

4) 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部長・歯学部長

1. はじめに

徳島大学歯学部口腔保健学科は歯科衛生士と社会福祉士を養成する徳島大学で初めての4年制医療・福祉系教育課程であり、現在3学年が在籍し、新しいカリキュラムや特色ある教育プログラムに取り組んでいるところである。今回のプログラムはその一つであり、社会福祉先進国であるフィンランドのヘルシンキメトロポリア応用科学大学と連携して国際的な社会福祉教育プログラムを構築するものであり、平成21年度徳島大学パイロット事業支援プログラムにも採択されている。本年度は取り組みの初年度として同大学の教員・学生を招聘し、教育システムの開発に関する打ち合わせと両国学生による Small Group Discussion を実施したのでその概要を報告する。

2. 取り組みの概要

①ヘルシンキメトロポリア応用科学大学への訪問およびフィンランド高齢者福祉施設の視察

ヘルシンキメトロポリア応用科学大学はフィンランドの医療科学技術系大学の一つであり、同大学口腔衛生学科との交流は既に平成20年度から開始している。本年度は今回の取り組みに際して、まず本学科教員が同大学を訪問し、現地でのプレゼンテーションおよび打ち合わせを行った。さらに社会福祉先進国であるフィンランドの高齢者介護施設を視察するとともにその福祉システムの現状を調査した。

②本取り組みに関する教員打ち合わせ

平成21年11月に同大学教員2名を招聘し、フィンランドにおける社会福祉事情および歯科衛生士教育プログラムに関する講演会を実施するとともに、同教員を交えた本取り組みに関する打ち合わせを行った。

③学生間交流プログラム

同大学はすでに宮城県仙台市に在する宮城

高等歯科衛生士学院との学生間交流協定を締結しており、毎年3年次学生を約3ヶ月間留学させている。今回、同学院への留学生2名(期間:9月~11月)を徳島大学で2週間受け入れ、本取り組みに参画させた。その間のプログラムとして本学科1年次学生には留学生2名と共に英語による合同授業を、また2年次学生には将来の合同PBLを想定して「The difference of educational system for dental hygienist between in Helsinki Metropolia University of Applied Science and The University of Tokushima」のテーマを設定し、Small Group Discussion(写真1)と全体討論(写真2)を実施した。



写真1 2年次の Small Group Discussion



写真2 全体討論

④Web カメラを利用した遠隔地交流

本取り組みの最終目標は同大学との国際的教育プログラムの構築であり、その主体はPBLを主体とした遠隔授業である。今回はその前段階としてまずインターネットを介した交流を試みた。

すなわち徳島を訪問した教員・学生がフィンランドに帰国後、web カメラを利用して本学科学生と交信した（写真3）。この交信は既存のインターネット回線を利用しているため、セキュリティー等に問題は残るがコミュニケーションツールとして支障はなく、またプロジェクターに映写することでグループディスカッションにも使用可能であることが判明し（写真4）、本取り組みの目標である両国間でのPBL授業の構築がさらに現実的となった。

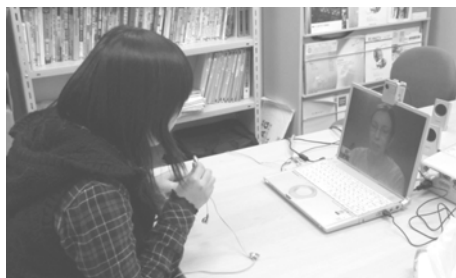


写真3 webカメラを用いた学生間交流

写真4 webカメラによる交信
(プロジェクター使用)

⑤「International Week 2010」（予定）

平成 22 年 3 月 15 日から 19 日にヘルシンキメトロポリア応用科学大学において「International Week 2010」と題した国際的教育カンファレンスの開催が予定されている。本学科からも教員を派遣し、「Dental hygiene and health promotion」の中で今年度の交流経過と成果を発表するとともに今後の展開等についても協議を行う予定である。

3. 結果および考察

①教員間協議の結果

ヘルシンキメトロポリア応用科学大学口腔衛生学科（修業年限は3年半：7セメスターで構成されている。）は中・長期的な教育ストラテジーが確立しており、そのなかですでに学生の問題解決能力を向上させるためのグループワーク等が実施されていた。これは本取り組みの主旨と合致するものであり、今後もPBLを中心とした国際的教育プログラムの開発を推進することで両国教員の意見が一致した。

②学生間交流授業

合同授業および Small Group Discussion 後のアンケート結果では、多くの学生が自分の英語力不足、コミュニケーション能力の低さに不満を感じており、このプログラムが学習意欲の向上に有効であったと思われる。さらに両国間の歯科衛生士教育あるいは社会福祉システムの違いを感じたとの意見もあり、本取り組みにおける初年度の目標は概ね達成できたと考える。しかし一方で「この交流授業の目的がわからない」とか「交流の輪に入れず、疎外感を感じた」との意見も一部にあったことから、今後はこれらの点を改善すべくプログラムを立案したいと考えている。

4. 結論および今後の展開

本取り組みの最終目標は遠隔授業を主体とした国際的社会福祉教育プログラムの構築であり、本年度はその前段階として社会福祉先進国であるフィンランドの歯科衛生士教育機関との学术交流を実施した。北欧の口腔保健学教育や社会福祉システムを学ぶことはこの取り組みのみならず、これからの医療・福祉教育においても有益であり、本年度のプログラムはその第一歩として順調に遂行できた。

一方、国内においては東京医科歯科大学歯学部口腔保健学科および新潟大学歯学部口腔生命福祉学科が、当学科と同様に歯科衛生士教育と社会福祉教育を実施している。将来的にはこれらの大学とも連携して本取り組みを推進し、健康長寿社会に貢献できる新しい医療人を育成したいと考えている。